

この本と私

読むことで
気付くこと
書くことで
判ることがある



「マレー蘭印紀行」

金子 光晴 著

表題のマレーはマレーシア。蘭印はオランダ領インドシナ。昭和初期に東南アジアを放浪した時の紀行文です。日本人が「開拓」目的で海外に進出した時代に、著者はあてもなくマレーシア・シンガポールを旅する。文中で表現される風景や、人々の営みはとてモリアルで、原色の絵の具を壁につばいに塗りたくったという印象を受けました。まるで現地にいるように、熱帯特有の突然のスコールや気だるい温度を感じられるような文章です。そして、「馬来」・「爪哇」という漢字表記。アジア好き、旅好きのココロをくすぐる表現だと思いました。

以前は、東南アジアが好きでよく旅していたものですが、バブル全盛の頃に海外旅行を覚えた私は、「飛行機に乗って外国に行くこと」が旅の目的となり、「海外に行つて、見て、感じてその後どうする?」ということを全く考えない旅行者でした。そんな私も、つい先日、短期留学から帰国。最初は、以前と変わらないおのぼりさんでしたが、そのうちに、日本では全く知らなかった人としての「まともな生活(小学校までに身につけること)」が見えてくるようになりました。たとえ観光地でも、住人にとっては生活の場。自分は、他所の土地にお邪魔しているということ。知らないことは一つずつ知っていけばいい。思えば、傍若無人な旅行者でした。いつかまた、東南アジアを旅する時もあるでしょう。その時は「お邪魔します」と言える旅人でありたい。

佑起子



中公文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞